



FSP

2023年度一般教育演習（フレッシュマンセミナー）
グローバル・キャリア・デザイン1
第33回ファースト・ステップ・プログラム（FSP）アジア
成果報告書

目次

はじめに.....	3
ファースト・ステップ・プログラム (FSP)	4
第33回FSPアジアの概要.....	4
研修日程.....	5
グループ活動と第33回FSP生の紹介.....	6
リーダーズ.....	12
支援員・TA・ボランティアの紹介	13
担当教職員一覧.....	14
海外研修前の活動.....	15
事前授業.....	16
各交流会・学習会	20
シンガポール.....	24
研修に協力してくださった方々一覧.....	25
北海道大学シンガポール校友会エルム会.....	27
【教育機関】	28
Singapore Management University	28
Marina Barrage Visitor Centre Tour.....	30
Curtin University Singapore.....	31
【企業・機関】	33
アジア・大洋州三井物産株式会社.....	33
日本航空株式会社.....	35
Institute of Molecular and Cell Biology.....	37
シンガポール国立博物館.....	39
【自主学习】	40
マレーシア.....	42
研修に協力してくださった方々一覧.....	43
振り返りミーティング.....	44
【教育機関】	45
Management & Science University	45
Universiti Putra Malaysia.....	47
【企業・機関】	49
三菱商事株式会社.....	49
イオンマレーシア	51
世界銀行マレーシア事務所.....	53
マレーシア国立博物館.....	55
【自主学习】	56

事後活動.....	58
第1回事後授業.....	59
第33回FSP受講生の声.....	60
終わりに.....	62
謝辞.....	63
編集後記.....	64

はじめに

ファースト・ステップ・プログラム (FSP)

第33回 FSP アジアの概要

研修日程

グループ活動と第33回 FSP 生の紹介

リーダーズ

支援員・TA・ボランティアの皆様の紹介

担当教職員一覧

ファースト・ステップ・プログラム (FSP)

グローバル・キャリア・デザイン (通称：ファースト・ステップ・プログラム※) は、春休みまたは夏休みに実施される、2週間程度の海外研修プログラムです。参加者は1プログラムにつき25名～30名程度です。研修前の事前授業では、研修の準備や海外における注意点やキャリアプランについて学ぶことができます。研修中は、海外協定校等の教育機関での授業受講や学生交流、グローバルに事業を展開する企業や法人、国際機関等の海外拠点での実務家の方々による御講話、グローバルに活躍する社会人の方々との対話、および関連プロジェクトや施設の視察を行います。研修後の事後授業では、本科目を通して学んだことを発信・共有することができます。

プログラム参加を通して、学生の皆さんがグローバルなキャリアについて視野を広げ、自身のキャリア形成に活かすこと、そして、将来的に、「グローバル」にも「日本」でも、自身のキャリアを活かす「グローバル」な人材として育てていくことを目指します。

研修に参加した年次を繋いで、参加者間の縦の絆が強いことも FSP の特徴です。

※本学内外で実施される様々な海外プログラムに挑戦する最初の一步となる意味を込めて、通称「ファースト・ステップ・プログラム (FSP)」と呼ばれています。

(HP『北大生のための留学ガイド』を参考に作成 以下リンク

<https://be-global.oia.hokudai.ac.jp/>)

(文責：仲村渠)

第33回 FSP アジアの概要

- (1) 参加人数：31名
- (2) 実施期間：2024年2月22日(木)～3月6日(水)
- (3) 研修先国：シンガポール・マレーシア
- (4) 奨学金：北海道大学・ニトリ海外留学奨学金(希望者のみ)
受給金額：5万円/1人
- (5) 大学から渡航に係る費用について一部支援あり

(文責：仲村渠)

研修日程

日付	時間	訪問先・活動内容
2/22 (木)	移動	新千歳→羽田→シンガポール
2/23 (金)	09:30-11:30	アジア・大洋州三井物産株式会社様 御講話
	13:00-16:00	Singapore Management University 学生交流
2/24 (土)	10:00-12:00	日本航空株式会社様 御講話
	16:00-17:00	Marina Barrage Visitor Centre Tour (Sustainable Singapore Gallery)
	18:00-20:00	北海道大学シンガポール校友会エルム懇談
2/25 (日)	終日	自主学習
2/26 (月)	09:00-15:00	Curtin University Singapore 授業受講・学生交流
	16:30-18:00	Institute of Molecular and Cell Biology 様 御講話
2/27 (火)	移動	シンガポール→クアラルンプール
2/28 (水)	08:30-11:30	振り返りミーティング
	14:30-16:00	三菱商事株式会社様 御講話
2/29 (木)	09:00-17:30	Management & Science University 授業受講・学生交流
3/1 (金)	09:30-12:00	イオンマレーシア様 御講話
3/2 (土)	10:30-12:00	マレーシア国立博物館
	午後	自主学習
3/3 (日)	終日	自主学習
3/4 (月)	終日	Universiti Putra Malaysia 授業受講・学生交流
3/5 (火)	09:00-11:00	世界銀行マレーシア事務所様 御講話
	13:00-17:30	第1回事後授業
	移動	クアラルンプール→成田
3/6 (水)	移動	成田→羽田→新千歳

(文責：小野塚)

グループ活動と第33回FSP生の紹介

第33回FSPでは、31名のFSP生が6つのグループに分かれて様々な活動を行いました。ここでは、各グループの活動概要、メンバー、グループごとの振り返りを紹介させていただきます。

※所属は2024年3月時点。

※(リ)はチームリーダー、(サブ)はサブリーダー、(グ)はグループリーダーを表す。

※チームリーダーとサブリーダーから構成されるリーダーズについては、P.12に記載。

※事前調査とは、全体学習会で使用した研修先情報シート・スライド作成のための調査、その作成を指します。全体学習会については、P.22に記載。

グループ1

 <p>総合教育部1年 (グ)世古 仁美</p>	 <p>理学部2年 (リ)井艸 駿太</p>	 <p>経済学部1年 岡田 琉生</p>
--	--	--

 <p>総合教育部1年 原田 優雅</p>	 <p>農学部1年 罇 美利</p>
--	--

活動概要：事前調査・各大学での英語プレゼンテーション・報告書執筆

私たちは、訪問先の各大学で、英語で北海道大学の魅力を伝えるプレゼンテーションを担当しました。初めから、対面でのミーティングの機会を多く設け、グループで一体となって発表の内容を作り上げていきました。しかし、研修前の先生方との対話で、グループ内やチーム内でのコミュニケーション不足を指摘していただきました。実際に、グループのミーティングはプレゼンテーションの内容を議論するばかりで、自分たちの考えや悩みを話すことができていませんでした。また、プレゼンテーションはチーム全体の成果物であるという認識が不足しており、グループ外のメンバーや先生方からフィードバックを受ける機会が足りていませんでした。そこでコミュニケーション

の重要性を理解した私たちは、研修中にグループ内で細かい連絡を欠かさず行って信頼関係を築いていきました。その結果、メンバー間でプレゼンテーションスキルの細かい部分まで指摘し合って練習を重ねることができるようになったと同時に、先生方やチームメンバーから何度もフィードバックを受けることで、プレゼンテーションをブラッシュアップさせ、最後にはそれぞれが楽しみながら実りある発表をすることができました。

(文責：鱒)

グループ2

 <p>総合教育部1年 (グ) 鱒 竜之介</p>	 <p>文学部2年 小川 はるか</p>	 <p>法学部1年 熊谷 ゆらら</p>
--	---	---

 <p>水産学部2年 玉本 くるみ</p>	 <p>経済学部2年 星野 葵</p>
--	---

活動概要：事前調査・第33回FSPチームメンバーとのオンライン交流会企画/運営・報告書執筆

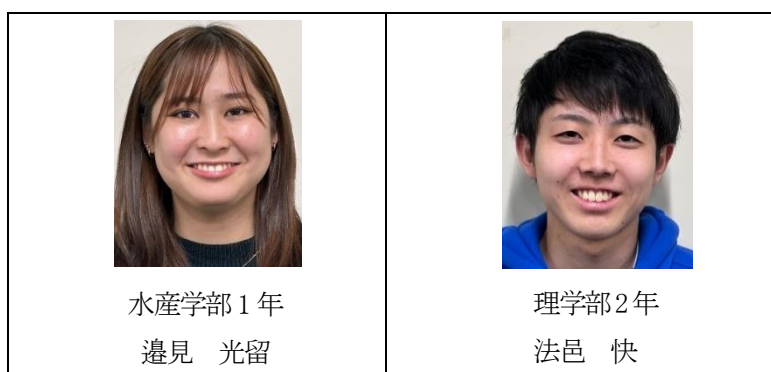
私たちグループ2は、学年問わず各々が自分の意見を自由に言える環境のもと、それぞれの個人的な意見を尊重し合って活動に励みました。第33回FSPチームメンバーとのオンライン交流会の企画/運営がグループ分けの直後だったため、他のグループと比べてグループ内の信頼関係を早期に構築でき、それ以降のグループ課題などに対して建設的な話し合いを円滑に進められたと感じています。また、研修先情報シートは、グループ2全員で意見を出し合い、内容を考えることで「グループの成果物」として完成させることができました。一方で、グループ2内のコミュニケーションが活発だったが故に、活動を通して必要となった話し合いや生じた疑問があっても、グループ内で完結してしまうことが多く、他のチームメンバーとの連携や働きかけを行うことができていないという課題が、支援生の方々と先生方との対話で見つかりました。ここで、課題発見までに時間がかかってしまったため振り返りの大切さと、チームメンバーとの協働の重要性を実感しました。課題の発見は、私たちがチームのあり方について話し合った内容をリーダーズに提案するなど、グル

ープ2から全体に発信する活動へ繋がりました。これを経て、グループ2内でそれぞれの個性を活かしてフィードバックし合い、目標達成を図るグループワーク力、また、チーム全体にも目を向け働きかけるチームワーク力を身に付けることができました。

※第33回FSPチームメンバーとのオンライン交流会についてはP.20に記載。

(文責：玉本)

グループ3



活動概要：事前調査・部屋割り表の作成・親睦会の企画/運営・報告書執筆

Singapore Management University における学生交流時のファシリテーター

研修前には、自分たちが担当する役割の他に、チームのためにグループ3として貢献できることはないかと話し合ってきました。そこで、支援生の方々と相談を重ね、独自にFSP生同士の交流、研修に際する悩みの共有や解消を目的とした親睦会を企画しました。チームメンバーが必要としていることは何なのか、どのように開催することでチームメンバーの不安を解消することができるのかについて、互いに何度も意見し合うことで、1からテーマや方法を考え上げる難しさを経験するとともに、率直な意見を言い合うことができ、より良い関係性を築くことができました。

また研修中には、Singapore Management University (SMU) における学生交流時のファシリテーターを務め、英語でのriddle activity (なぞなぞ) を行いました。SMUの学生、FSP生の合同グループをつくり、グループ単位で答えを考えてもらうことで、SMUの学生、FSP生の交流を深めるきっかけを作り出すことができ、多くの学生から「楽しく交流することができた」との声を頂きました。ファシリテーターについては、直前まで人数の規模や時間など未確定な要素が多く、前日まで何度

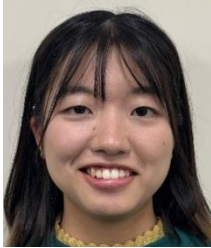

も修正を加え、場の状況に合わせて企画を進行しました。このことで、臨機応変に物事を進める力やチームワークを高めることができました。

※親睦会についてはP. 21 に記載。

(文責：邊見)

グループ 4

 <p>総合教育部1年 (グ) 二宮 育己</p>	 <p>法学部1年 伊藤 悠希</p>	 <p>工学部1年 北谷 康朗</p>
--	--	--

 <p>総合教育部1年 鈴木 結奈</p>	 <p>工学部1年 坂内 泰大</p>
---	--

活動概要： 事前調査・第33回FSP生リストの作成・全体学習会の企画/運営・報告書執筆

各々が全く異なる視点を持ち、多様性に富んだ私たちグループ4は入念な話し合いを通して認識のすり合わせを行いながらグループワークを行い、個人の長所を生かした活動に努めてきました。皆が行った事前学習の成果を共有し深めあう目的で開催された全体学習会の企画/運営を行いました。その際は、メンバーの多様な視点から運営上の問題点などを洗い出し、スムーズに計画通り進行を行うことができました。また事前調査では、興味関心から調べたことをグループ内で共有することで、企業や国際機関、大学での研修につながるより深い知識を得ることができました。一方で、個人の長所を生かす方針のために、役割分担が明確になりすぎてグループではなく個人の集まりとして活動が進んでいってしまうという問題点がありました。私たちは自分達でこの問題点に気づくことができなかつたのですが、先生方や支援生の方々との対話を通して問題点を把握し、それ以降分担して行っている作業の共有をすることで、担当以外の作業も自分ごととして捉えることができるようになりました。私たちはこのグループ活動を通して、対話の重要性と当事者意識を持つことの大切さを学びました。このことは研修中のグループワークやチームとしての活動への貢献にも繋

がり、グループ全員が大きな成長を遂げることができました。

※全体学習会についてはP.22に記載。

(文責：坂内)

グループ5

 <p>農学部1年 (グ) 永田 悠真</p>	 <p>総合教育部1年 有泉 佑香</p>	 <p>総合教育部1年 田村 楓</p>
 <p>工学部1年 早川 采良</p>	 <p>理学部1年 (サブ) 藤井 心香</p>	

活動概要：事前調査・FSPの修了生とのオンライン交流会企画/運営・成果報告プレゼンテーション・報告書執筆

グループ5は全員が1年生でした。早くから対面で活動する機会を多く設けたことにより、関係性の構築ができました。MTGに参加ができなかった人がいた場合も、情報共有を徹底し、次回以降の話し合いに参加できるようにしました。事前調査では、提出期限がテスト期間と重なっていたため、早めのスケジュールリングを心がけました。早くから取り組んだことで支援生の方々からFBをいただきながら、より深い調査をすることができたと思います。事前調査と並行してFSPの修了生とのオンライン交流会の企画も行いました。オンライン交流会の目的について話し合う中で少しずつお互いの意見を本音で話し合えるようになり、グループ5の関係性がより一層深まったように思います。その時に関係構築ができたおかげで、その後の活動ではグループ内の意見交流が活発になりました。

海外研修から帰国した後は成果報告会の準備に取り掛かりました。成果報告会では、“FSPで何を得られたのか”について発表しました。発表の準備をするにあたって、その発表内容について1ヵ月間かけて何度も話し合いを重ねました。より納得のいく内容を伝えられるよう、先生方に面談を何回もお願いし、他のグループの受講生にもアイデアやアドバイスを貰いながら推敲を重ねました。スライドの作成や発表

時の原稿の制作に割いた時間は短かったですが、時間をかけて発表内容を確立させたため、FSP の魅力が伝わる成果報告会になりました。

グループ5のいいところは対面での参加率がほぼ100%なところ。目の前で頑張っている仲間の姿を見ることで、お互いを高めあいながら活動することができました。

※FSPの修了生とのオンライン交流会についてはP.23に記載。

(文責：早川)

グループ6

 <p>理学部1年 (グ) 瓦田 優香</p>	 <p>法学部1年 大島 隆史</p>	 <p>法学部1年 小野塚 千瑛</p>
 <p>総合教育部1年 鎌田 侃</p>	 <p>水産学部1年 菅 錬之介</p>	 <p>教育学部1年 仲村渠 彩香</p>

活動概要：事前調査・成果報告書まとめ（執筆・編集・仕上げ）

私たちは、FSPの開始当初、グループで活動する意識が足りておらず、研修前には、対面はおろかオンラインで研修前の学習や準備のために集まる機会も他グループに比べると圧倒的に足りていませんでした。さらに、成果報告書の編集という大きな仕事に対する焦りだけが先行し、独断で動いてしまうことも多く、グループとしてまともに機能しているとはいえない状況だったと考えています。そのため、支援生の方々からの手厚い支援により当初予定されているよりも早く先生方との対話の機会をいただきました。そこで初めてグループメンバーの本音を知り、FSPに対する心構え、本来の目的を再認識することが出来ました。そこからは各々にFSPは個人活動ではなく、グループやチームで活動するものだという意識が芽生えました。それによって、積極的にグループ活動を行い、研修に備えることが出来たと思います。また、グループ6は研修前に、先生方との2回の対話の機会をいただきました。この2回の対話によって、グループ6は研修先で学びを深めるため

に研修前の活動をするという意識が芽生え、成果報告書への取り組みだけでなく、事前調査にも力を入れる方針になりました。

(文責：小野塚)

リーダーズ

第33回FSPアジアのリーダーズは、チームリーダー1名、サブリーダー2名から構成されています。ここでは活動概要、具体的な活動内容、メンバー、振り返りを紹介します。

活動概要：プログラム全体のまとめ役・各グループリーダーとの連携と協力・スケジュール管理・科目教員・事務スタッフ・支援生の方々との協力

具体的な活動内容：各グループとのミーティング、事前課題の学習会の企画/運営（グループリーダーとの共同）、研修中の振り返り会の企画/運営、チームメンバーの一人一人とミーティング など

メンバー：井艸駿太（チームリーダー）・藤井心香（サブリーダー）・上村耀平（サブリーダー）
リーダーズの振り返り：

第33回FSPのリーダーズは活動が始まって以来、先生やチームメンバーとの連携だけでなく、リーダーズ3人の中ですら連携がうまく取れないことに悩み続けていました。研修中によりやうく自分たちのリーダー像が明確になり始め、まず3人で連携が取れるようになりました。それから自分達は先生とチームメンバーのパイプ役という役割を認識し、その役割を果たせるよう報連相の徹底を心がけ、チームメンバーのFSPでの学び、チーム全体の活動がより良いものになるように何をすべきか模索し続けました。正直な事を言うともっと早く自分達の役割を理解していればと後悔することも多々ありましたが、リーダーズ活動を通して3人は大きな成長をすることができました。

(文責：上村)

支援員・TA・ボランティアの紹介

ここでは、FSP生の学びを支えていただいた8名の支援員の方々と1名のTAの方と3名のボランティアの方々を紹介させていただきます。なお、これ以降のページでは、TAと支援員とボランティアの方を総称して支援生と表記しています。

記載内容は以下の通りです。

- ・担当
- ・氏名
- ・所属・学年（2024年3月時点）
- ・FSP生として参加した会と地域
- ・第33回FSPでご支援していただいたグループ



支援員
角田 亮平さん
工学院修士1年
第26回FSPアジア
グループ1、2



支援員
松田 涼花さん
経済学部4年
第28回FSPオンライン
グループ4、5



支援員
齋藤 梨乃さん
医学部4年
第29回FSPオンライン
リーダーズ



支援員
山下 颯斗さん
工学部3年
第30回FSPオンライン
グループ1、4



支援員
伊丹 萌華さん
水産学部2年
第31回FSPオンライン
グループ5、リーダーズ



支援員
羽鳥 健太郎さん
農学部2年
第31回FSPオンライン
グループ2、5



支援員
佐々木 有那さん※
工学部2年
第32回FSPアジア
グループ6



支援員
西本 桃花さん
法学部2年
第32回FSPアジア
グループ3、4



TA
酒井 聡史さん
総合化学院博士1年
第23回FSPアジア
グループ3、6



ボランティア
神戸 結衣さん
農学部4年
第29回FSPオンライン
グループ1、2、3



ボランティア
廣瀬 健さん
理学部4年
第28回FSPオンライン
グループ4、5、6



ボランティア
松原 康稀さん
法学部4年
第28回FSPオンライン
グループ1、リーダーズ

※佐々木さんは、引率補助として2月27日(火)から海外研修にご同行してくださいました。
(文責：仲村渠)

担当教職員一覧

※2024年3月現在

科目責任教員 北海道大学 高等教育推進機構 国際教育研究部
国際産学協働教育ユニット
講師 川端 千鶴 先生
科目担当教員 北海道大学 総長特別参与
高等教育推進機構 国際教育研究部
国際産学協働教育ユニット
客員教授 井上 修平 先生
運営スタッフ 北海道大学 学務部国際交流課
橘様・劉様

(文責：仲村渠)

海外研修前の活動

事前授業

各交流会・学習会

事前授業

第33回FSPでは、研修前の12月下旬から1月末にかけて4回的事前授業が行われました。先生方からは、研修に関する直接的なご指導やガイダンスをいただきました。(第1回授業：オリエンテーション、第2回授業：地域研究・企業研究・大学情報、第3回授業：危機管理・キャリアプラン、第4回授業：キャリアプラン・グループ1のプレゼンテーション発表に対するFB) また、支援生の方々からは、事前授業だけではなく全期間を通して、実際にFSPを受講したからこそわかる貴重なアドバイスをいただきました。

第1回

日時：12月20日(水) 18:15-19:45

場所：北海道大学 学生交流ステーション111大講義室

概要：担当教職員・支援生の方々・第33回FSP生の自己紹介・授業目標の確認・マナーについて

初回授業では、チームメンバーを知ることと授業の目標・内容を理解することを目標として活動しました。

初めに担当教職員の方々と支援生の方々の自己紹介を行った後に、第33回FSP生の自己紹介を行いました。1分30秒という短い時間で、自分のことを知ってもらうために工夫をして自己紹介を行いました。第33回FSPに申し込んだ動機などを話すことで、お互いについて深く知ることができました。次に、この授業の目標やFSP生に求められることについて確認しました。チーム全体で目標を把握すると共に、それぞれが第33回FSPにおける自分の目標を考える機会になったと思います。最後に、授業受講におけるマナーやメール連絡についての注意事項の説明がありました。特にメール連絡については基本的なマナーについて理解していない点が多く、キャリアハンドブックを読み込むなど第2回授業までにやるべきことが明確になりました。



【自己紹介の様子】

(文責：仲村渠)

第2回

日時：1月17日（水） 18:15-19:45

場所：北海道大学 学生交流ステーション 111 大講義室

概要：事前調査の重要性・方法

第2回事前授業では、地域/大学/企業の事前調査について主に井上先生から御講義いただきました。国・企業・国際機関の基本的な情報を示していただき、研修先への理解が少しずつですが深まってきました。支援生の方々からも事前調査に関するアドバイスを頂きました。特に「自分の担当していない研修先についても理解を深めておくことでより学びを得られる」というアドバイスは、多くのFSP生の事前調査への取り組み方を見直すきっかけになったと思います。授業の終盤では、研修先においてFSP生に求められていることが示されました。相手が話していることを聞くだけでなく、メモを取るということは多くのFSP生が出来ているように感じましたが、質問をして理解を深めるということはFSP生全体がより積極的に行っていくべきだと感じました。



【井上先生の御講義の様子】

(文責：仲村渠)

第3回

日時：1月24日（水）18:15-19:45

場所：北海道大学 学生交流ステーション 111 大講義室

概要：危機管理について・「キャリア」を「プラン」するうえで重要な点

第3回の事前授業では、研修にあたっての危機管理について井上先生から御講義いただきました。感染症や犯罪、地政学的リスクなどを先生方の体験談を交えながらご教授いただき、改めて生活環境の全く異なる異国に行くということ、それに伴うリスク管理の大切さを認識することができました。加えて、川端先生からもご自身の豊富な経験に基づいた海外での危機管理における助言をいただきました。先生方にご教授いただいたことを無駄にしないよう、今日の御講義は今後も忘れないようにしなければならないとFSP生一同、浮かれた心が引き締まる思いでした。

最後に川端先生から今後のキャリアをプランしていくにあたり大切なことを御講義いただきました。先生が御講義の中で引用された、教育心理学者のジョン・D・クランボルツ博士が1999年に提唱した「計画された偶発性」というキャリア理論が表すように、個人のキャリア形成には、偶然起こる予期せぬ出来事を主体性や努力によって最大限活用し、力に変えることが重要だと知ることができました。



【御講義を拝聴するFSP生の様子】

(文責：小野塚)

第4回

日時：1月31日（水）18:15-19:45

場所：北海道大学 学生交流ステーション111 大会議室

概要：グループ1によるプレゼンテーション発表とFB・キャリアデザイン・リーダーズの目標の表明

第4回の事前授業では、グループ1のプレゼンテーションの発表とFSP生全員からのFBを行いました。このプレゼンテーションは、「Attractions of Hokkaido University」を題とし、研修先の協定大学にて現地の方々に北海道大学について知ってもらうために行うものです。グループ1のプレゼンテーションを全員で見ることで、チーム全体で協力してプレゼンテーションを作り上げていくことの重要性を感じました。

井上先生と川端先生から先生方のキャリアについて御講義いただきました。お二人の御講義はご自分の経験に基づくものであり、学生の視点からは発見しにくいキャリアに関する重要な点が多く述べられていました。井上先生のキャリアデザインについての御講義では、北海道大学を卒業し、グローバルビジネスの舞台で活躍してきた井上先生自身のキャリアを参考に、人生の失敗と挑戦の連続性を改めて認識しました。川端先生ご自身のキャリアについての御講義では、ジョブ・ホッピングという考え方をご教授いただきました。少しでも良い条件を求めて転職するという考え方は、終身雇用の考え方が定着した日本で暮らしてきた私たちにとっては珍しいものでした。まだまだ自分の知らないキャリアプランがあるのだと思いました。

最後に、リーダーズによる目標表明が行われました。具体的には全員がFSPに主体的に参加すること、他者との連携を学ぶこと、このFSPを人生にきっかけを与えるイベントにしてほしいということが発表されました。



【グループ1のプレゼンテーション発表の様子】

(文責：大島)

各交流会・学習会

第33回FSPでは、研修に向けた準備のため様々な交流会や学習会を行われました。ここでは、各交流会や学習会の概要と企画/運営を担当したグループの振り返りを紹介します。

第33回FSP チームメンバーとのオンライン交流会

日時：2024年1月16日（火）18:15-19:15

場所：オンライン（Zoom）

企画/運営：グループ2

参加者：第33回FSP生・川端先生・井上先生

私たちは、チームメンバーとの交流を深めるためにオンライン交流会を実施しました。交流会では、5つのブレイクアウトルームにわかれ、自分の順番の前の人全員の名前を全て言ってから自分の名前を言う、積み木式自己紹介を最初に行いました。その後、サイコロを振り、回答者以外が順番に質問をして、出た目のお題の回答を当てるゲームを行いました。ブレイクアウトルームは、各グループメンバーが被らないよう振り分け、2度入れ替えました。交流会開始時は多少のぎこちなさはあったものの、ゲームを通して次第にFSP生の緊張は解けていったように感じました。「チームメンバー間のコミュニケーションを図る」という交流会の目標は、同じブレイクアウトルームにいたメンバー間では達成することができたと思います。しかし、2度のブレイクアウトルームの入れ替えで被らなかったメンバーとは交流をすることができず、完全な目標達成はできませんでした。この反省は、交流会の運営にばかり注力してしまい、目的や達成すべき目標について深く話し合えなかったことが原因だと考えました。そのため、この活動は改めて「チーム」の定義を考え直し、また目的意識の重要性を認識するきっかけとなり、その後の活動に活かすことができました。



【1月16日 オンライン交流会の様子】

（文責：玉本）

親睦会

日時：2024年2月12日（月）20:30~21:00

2024年2月15日（木）15:00~16:00

2024年2月20日（火）20:00~21:00

場所：オンライン（Zoom）

企画/運営：グループ3

参加者：第33回FSP生

私たちは、FSP生が持つ研修に関する不安を共有し解消すること、FSP生同士の親睦を深めることを目的として、研修前に3回にわたり親睦会を実施しました。全3回に共通して、FSP生が気軽に参加できるような内容、呼びかけを意識しました。第1回の親睦会を開催する前に、スーツケースの大きさや、現地でかかった費用、持っていく洋服の枚数など、FSP生が気になっているであろうことを事前に支援生の方々にお伺いし、親睦会では、その内容を共有しつつ、互いの不安ごとについて相談し合いました。1日だけでなく、第2回、第3回と複数の日程で開催したことで、多くのFSP生が参加することができました。親睦会を通して、ただ不安や気になることを解消するだけでなく、共通の不安を共有し、それについて話し合うことで、研修前にグループの垣根を超えて打ち明け合うことができました。また、研修前に親睦を深めたことで、研修中の相談や話し合いをスムーズに行うことに繋がりました。



【親睦会の様子】

（文責：奥村）

全体学習会

日時：2024年2月7日（水）18:00~19:30

2024年2月19日（月）10:00~11:30

2024年2月20日（火）15:00~16:00

場所：学生交流ステーション111大講義室（7日）、オンライン（Zoom）（19日・20日）

企画/運営：グループ4

参加者：2月7日 第33回FSP生・川端先生・井上先生・支援生（西本さん、佐々木さん）

2月9日 第33回FSP生

2月10日 第33回FSP生

グループ4は2月7日（水）（対面及びオンライン、6講時）及び2月19日（月）、2月20日（火）（オンライン）に全体学習会（以下「学習会」と表記）を開催しました。目的は1回目が「事前調査で得た学びをチーム全体で深めること」であり、2回目は「メンバーの主体的な参加を促し、研修直前に学びを深めること」でした。1回目の学習会では各グループにスライドを作成してもらい、発表時間を明確に決めながら進めました。オンライン接続のための機材確認やタイムマネジメントが課題でしたが、グループで協力して成し遂げることが出来ました。2回目の学習会は、事前調査の知識を忘れずに研修へ臨めるようにする目的で、研修直前に行いました。2回目は、1回目の学習会が硬い雰囲気であったという反省を受け、オンライン形式にして自由に参加できるようにし、また質問時間を長く取りました。1回目の学習会を踏まえて2回目の学習会前までで得た学びを、質疑応答によって更に掘り下げることができました。このような深い学びから事前学習の大切さに気づきました。学習会で学びを深めたことで、御講話を受けるための前提知識が身につき、積極的に質問をするなど研修先での能動的な学びに繋がりました。



【2月7日（水）学習会の様子】

（文責：二宮）

FSP 修了生とのオンライン交流会

日時：2024年2月9日（金）18:15~19:15

場所：オンライン（Zoom）

企画/運営：グループ5

参加者：第33回FSP生・川端先生・井上先生・FSP修了生の皆様

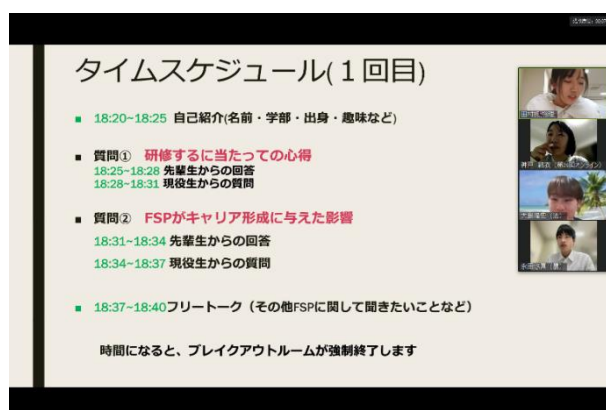
私たちは、FSP修了生との交流を通して、FSPにおける心得とFSPでの活動をキャリア形成にどう生かすかについて考えるという目的で、オンライン交流会を行いました。

まず、交流会の目的を決めるにあたり、FSP生にFSP修了生に聞きたいことについてのアンケートを行いました。その結果をもとにグループ5内で話し合いを重ね、交流会の目的を定めました。交流会前に支援生の方々とFSP生にご協力いただき、自主的にリハーサルを行いました。そこでいただいたフィードバックを活かして、定めた目的を達成できるよう、適切な実施形態を考えました。

交流会では、こちらで話題を提示しブレイクアウトルーム内でのタイムスケジュールも細かく定めました。1つのブレイクアウトルームの人数を3、4人にし、気軽かつ気楽に交流が行いやすい雰囲気になるように工夫しました。また、先生方には各ブレイクアウトルームを自由に周っていただき、FSP修了生の皆様やFSP生との交流を楽しんでいただきました。交流会後には、振り返りアンケートを行い、各ブレイクアウトルームで話した内容をまとめてチーム全体に共有しました。

私たちグループ5は、オンライン交流会の運営を通して目的の重要性を学びました。当初はオンライン交流会を開催する目的を考えておらず、実施形態だけを先に決めようとしていました。しかし、目的が定まっていない状態では実施形態を決める基準が曖昧で、話し合いにかなりの時間がかかりました。そこで、オンライン交流会の目的についてじっくりと話し合い、方向性を定めると、何を重要視するかが明確になりました。その後の話し合いでは、実施形態がスムーズに決まりました。このことから、目的意識の重要性を実感し、他の活動でも目的を意識しながら活動するようになりました。

限られた時間の中での交流でしたが、FSP生それぞれがFSPにおける心得やキャリアについて考える良い機会となったと思います。



【2月9日（金）オンライン交流会の様子】

（文責：有泉）

シンガポール

※以下、敬称略

研修に協力して下さった方々一覧

北海道大学シンガポール校友会エルム会

【教育機関】

Singapore Management University

Marina Barrage Visitor Centre Tour

Curtin University Singapore

【企業・機関】

アジア・大洋州三井物産株式会社

日本航空株式会社

Institute of Molecular and Cell Biology

シンガポール国立博物館

【自主学習】

研修に協力してくださった方々一覧

ここでは、第33回 FSP のシンガポールでの研修の際に協力してくださった方々のお名前とご所属を記載させていただきます。学生の方々は、クラブ名のみ記載しております。

研修先 (敬称略)	お名前 (ご所属)
北海道大学シンガポール校友会エ ルム会	<ul style="list-style-type: none"> ・石田 卓 様 (JAPAN GREEN HOSPITAL PTE LTD JAPAN GREEN CLINIC 院長) ・伊藤 哲也 様 (日本貿易振興機構 (ジェトロ) JFOODO シンガポール代表) ・岡部 善尚 様 (Hokkaido Government Representative Office Registered in Singapore Covering ASEAN Countries 所長) ・加藤 博之 様 (株式会社明成商会 シンガポール総代表 シンガポール支店長) ・高井 典子 様 (Procter & Gamble 研究開発本部 シンガポール研究所 ファブリック&ホームケア 香りのサイエンティスト・デザイナー) ・遠山 祐典 様 (シンガポール国立大学メカノバイオロジー研究所 准教授) ・成田 義規 様 (Chugai Pharmabody Research Pte. Ltd. Senior Principal Scientist) ・安田 哲 様 (ビンテージマネジメント株式会社 代表取締役 社長) ・松家 優香子 様 (YCP SG Pte Ltd YCP Solidiance ディレクター) ・矢野 拓也 様 (DBJ Singapore Limited Joint General Manager Corporate Finance & Strategic Investment)
Singapore Management University	<ul style="list-style-type: none"> ・Ms. Nora Wu (International Office Manager, Singapore Management University) ・Student Volunteers (Japanese Cultural Club Members) (Ambassadors)

<p>Curtin University Singapore</p>	<ul style="list-style-type: none"> • Professor Linley Lord (President and Pro Vice Chancellor, Curtin Singapore) • Dr Carolyn Koh (Director Research, External Engagement, Office of the Pro Vice Chancellor, Curtin Singapore) • Ms. Jessie Parrish (Project Manager for the UN Sustainable Development Goals, Curtin University) • Mr. Saud Siddique (Executive Chairman & Co-founder of Tigris) • Mr. Daniel Yeung (Principal & Co-founder of Tigris) • Mr. Gavin Chua (Meta Executive Member) • Student Volunteers
<p>アジア・大洋州三井物産株式会社</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 佐藤 香織 様 (アジア・大洋州三井物産株式会社 人事総務部人事室 室長) • 釘宮 智樹 様 (アジア・大洋州三井物産株式会社 消費者ビジネス開発部門流通事業室 室長補佐) • 岡島 文子 様 (Eu Yan Sang International Ltd (出向) Senior Manager, Liaison Special Project Lead)
<p>日本航空株式会社</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 土橋 健太郎 様 (日本航空株式会社 シンガポール支店長) • 江島 明代 様 (日本航空株式会社 海外基地客室乗員部シンガポール客室乗員室 室長)
<p>Institute of Molecular and Cell Biology</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 杉井 重紀 様 (Principal Investigator, Institute of Molecular and Cell Biology)

(文責：仲村渠)

北海道大学シンガポール校友会エルム会

私たちは、シンガポールで働かされている卒業生の方々と組織された北海道大学シンガポール校友会エルム会の方々と懇談する機会を設けていただきました。卒業生の方々には、これまでのキャリアについてやキャリアに対する考え方、そしてご自身の現在の仕事内容について伺ったり、私たちの学業やキャリアプランニングに関する相談にのっていただいたりしました。普段の学生生活では、社会人の方々とお話しする機会は減多にないため、貴重な機会となりました。中でも印象に残っていることは

「知らないことは選べない。学生のうちにとにかくいろいろなことを知って、選択肢を増やし、可能性を広げることが大切だ。そのためには、まだ職に就いておらず、制約のない学生のうちに、分野を問わずいろいろな大人に話を聞くこと。」

というお言葉です。このお言葉を聞き、海外研修後に様々な講演会に参加し、ただ講演を聞くだけではなく、直接質問しに行くことを心掛けようと決意しました。また、学内にとどまらず、とにかくいろいろな社会人に会いに行こうと思います。

そのほかにも、海外留学や駐在に対する考えを伺い、海外に行くことは目的ではなくて、何かをしたいと思った時の手段であると気づきました。また、海外で活躍されている方々を以前は遠い存在に感じていましたが、実際にお話をして親しみが湧き、身近に感じることができました。

実際に海外で働いている社会人の方々とお話ができ、今後のキャリア形成に影響を及ぼす経験を得られ、視野が広がる貴重な機会となりました。



【北海道大学シンガポール校友会エルム会の皆様との集合写真】

(文責：永田)

【教育機関】

Singapore Management University

私たちは2月23日（金）Singapore Management University（以下「SMU」と表記）を訪問しました。SMUは2000年に創立された大学で、2018年から北海道大学との大学間協定が結ばれています。

訪問の初めに、SMUのMs. Nora Wu（International Office Manager, Singapore Management University）とJapanese Cultural Club（以下「JCC」と表記）のメンバーが私たちを温かく迎え入れてくれました。異国の地での最初の交流には緊張が伴いましたが、SMUの皆様が日本語であいさつをしてくれたり、こちらの英語を理解しようとしてくれたりしたおかげで徐々に打ち解けていきました。

初めに、JCCの学生がSMUの食堂を案内してくださり、一緒に食事をしました。食堂には様々な国の料理があり、シンガポールが多民族国家であることを実感しました。私たちの中にはJCCのメンバーがおすすめしてくれた、ひき肉を使ったシンガポールの麺料理やチョコレートのドリンクを食べた人もいました。初めて食べる本格的なシンガポール料理は、辛いものやユニークな食感のものなど見慣れないものも多くありましたが、学生が普段食べている料理やドリンクを実際に体験することでSMUの学生の昼食の雰囲気を肌で感じることができました。

その後の交流セッションでは、私たちが北海道大学の魅力を英語でプレゼンテーションしたり、JCCのメンバーと混ざってクイズ大会を行ったりして、親睦を深めました。JCCは、日本語を勉強したり日本文化を学んだりするクラブで、メンバーはみな頑張って日本語を話そうとしてくれたり、好きな日本音楽やアニメについて教えてくれたりしました。ここで私たち日本人より日本に詳しいメンバーもあり、日本の文化がシンガポールで浸透していることを実感するとともに、自分たちが日本のことをいかに無知であるかということに気づかされました。

その後、SMUのアンバサダーのお二人が、SMUでの学生生活、国際的な活躍やキャリア発展のための制度などについて、プレゼンテーションをしてくださいました。ここで2つの特徴がありました。まず、SMUの教育機関としての魅力です。SMUは、世界中の大学への留学が可能で、国際性を重んじているとともに、インターンシップが卒業要件であるなど、キャリア形成への支援が整っています。実際に、アンバサダーのうちの1人は3カ国に留学したことで視野を広げ、2つの異なる職種の企業でインターンシップを行ったことで社会での豊かな実務経験が得られたとおっしゃっていました。また、プレゼンテーション技術についても刺激を受けました。お二人はなめらかな英語で堂々と話されていて、内容をしっかり理解しているからこそ内容がまっすぐ伝わるのだと気づきました。

今回のSMUへの訪問によって、私たちはグローバルな視野を広げることができました。海外から見た日本の姿は新鮮で、日本の新たな一面を知ることができました。たとえ英語での円滑なコミュニケーションが難しくても、相手のバックグラウンドを理解しようとする姿勢が大切だと学びました。今後は、コミュニケーションの際に、そのような姿勢を心がけていこうと思います。



【SMU での北大紹介のプレゼンテーションの様子】



【キャンパスツアー中の学生交流】



【SMU の皆様との集合写真】

(文責：罇)

【教育機関】

Marina Barrage Visitor Centre Tour

私たちは2月24日（土）に Curtin University Singapore（以下「CU」と表記）での事前研修として、シンガポールのサステナビリティに関する取り組みについて学ぶために、Sustainable Singapore Galleryにて、CUに手配していただいたガイドツアーに参加しました。ガイドの方に英語でシンガポールにおけるサステナビリティ推進の歴史や現状、今後の計画についてご説明いただきました。Sustainable Singapore GalleryはMarina Barrage Centreに併設されている教育施設です。Marina Barrageはダム機能を持ち、水門の開閉によって豪雨時にはシンガポール島を洪水から守る役割も果たしていると学びました。実際に水が流れる模型を使用したガイドの方による説明や、実際の水門を見ることによって洪水から島を守る仕組みを深く理解することができました。同時に、Marina Barrageはシンガポールで15番目の貯水池としての役割も果たしています。天然の水源を持たないシンガポールは慢性的な水不足を課題としており、雨水の収集、使用した水の再利用、海水の淡水化の3つの取り組みを行っていることを学びました。

今回のツアーでは、シンガポールの将来の取り組みの計画についても学ぶことができました。シンガポールでは現在、日本と同じように家庭ごとにまとめて水の使用量の通知が届きますが、将来的にはアプリで1日当たりの水使用量や、節水を呼びかける通知が届くシステムの導入を計画していると伺いました。先進的なシステムを導入することによって、人々の節水に対する意識を高めようとしており、限られた水資源を有効に利用するためには技術開発だけではなく、一人一人の水資源の有効利用に対する意識の改革が重要であると感じました。



【ボランティアの方の説明を拝聴するFSP生】

（文責：熊谷）

【教育機関】

Curtin University Singapore

私たちは2月26日(月)に、Curtin University Singapore(以下「CU」と表記)を訪問しました。CUはオーストラリアに本校を持つ公立大学です。今回訪問させていただいたのは、2008年にシンガポールに設置された分校で、コミュニケーション学部、商学部、情報科学部、看護学部の4学部と9つの大学院があります。

最初に、CUの学生の皆様にキャンパスを案内していただきました。新学期初日で多くの学生で賑わっていたキャンパスでは、CUの活気を体感することができました。また、キャンパス内には学生が交流できる様々なスペースやブースが設けられており、活発な学生交流を促す環境作りが行われていると感じました。

次に、Ms. Linley Lord (President and Pro Vice Chancellor, Curtin Singapore)より、CUの概要について説明していただきました。御講義の中で、CUは現在だけでなく未来を常に考え、SDGsを達成するための研究に力を入れているのだと学ぶことができました。更に、CUではいつでも学びたい分野を学べる環境が整っており、新しい分野、在学中に興味の湧いた分野を学ぶことができるようになっていて、学習分野を選択する自由度が高いことに驚きました。

講義では、Ms. Carolyn Koh (Curtin Singapore)、Ms. Jessie Parrish (Project Manager for the UN Sustainable Development Goals, Curtin University)、Mr. Saud Siddique (Executive Chairman & Co-founder of Tigris)、Mr. Daniel Yeung (Principal & Co-founder of Tigris)からご教授いただきました。Ms. KohからはKoelと呼ばれる鳥を例に用い、SDGs達成における生物保護の大切さ、Ms. ParrishからはオンラインでCUのSDGs達成に向けた取り組みについての詳細および今後の計画について御講義をいただきました。そしてMr. Siddique、Mr. YeungからはSDGsの達成をビジネスと結びつける重要性について教えていただきました。Mr. Siddiqueより、ホテルのアメニティである水の提供方法を例にしたSDGsとビジネスについてのお話がありました。水をペットボトルではなくガラス瓶で提供するビジネスをホテル側、製造業社側に提案し実行することでSDGsを達成しつつ、またホテル側のコストも削減できたと伺いました。この事業においてMr. Siddiqueは事業の大きさを特に重要視しており、大きなビジネスではなく小さなビジネスをターゲットにすることで素早く実行でき、SDGsの達成にかかる時間を削減できるとのことでした。持続可能な社会にするための行動をビジネスにし、利益を生み出すという視点は今までなかったため非常に興味深く、この御講話から視点を変えることの重要性を認識しました。また、ビジネスの大きさについては、小さな事業の利点である実行までの時間の短さを利用した、迅速な対応が求められる問題へのアプローチの仕方に感銘を受けました。SDGsは解決すべき大きな課題であり、一見大きな事業が必要に思えますが、小さなSDGsの達成を迅速に積み上げることで早く、確実に進むことができるのだと気づきました。

その後、昼食時にはMs. Koh、Mr. Siddique、Mr. Yeung、Mr. Gavin Chua (Meta Executive Member)、CUの学生方々との交流を行いました。Mr. ChuaからはAIに関するお話を伺いました。AIは人間が休んでいる間にも学習を続けているのだというお言葉に、私たち人間も絶えず学習を続けていこう

という学びへの意欲が高まりました。

そして、私たちはCurtin Dance Clubの皆様によるダンスパフォーマンスを見せていただきました。生き生きと踊る学生の様子からは、CUでの学生生活の充実を感じました。

最後に、キャンパスの屋上にあるLiteLeaf Vertical Farmという農園を見学させていただきました。CUでは、土地や水などの限りある資源を無駄なく活用しながら研究を行っているのだと学ぶことができました。

CUへの訪問では先生方や企業で働いている方からの講義、交流を通して、先生方、企業の皆様のSDGs、これからの未来に対する熱量、考えを実感することができました。特に、LiteLeaf Vertical Farmのような実践的なプロジェクトは北海道大学の農場や牧場を利用したSDGsへの取り組みとの共通点も多くありました。国によって様々な条件が異なる中でもそれぞれの国にできることを考え抜くことの重要性、そして自分自身もSDGsの達成へ小さなことから始めることの必要性を感じました。北海道大学の良さを生かし、SDGsの達成に向け自分自身にできることを見つけ行動に移していきたいと思います。



【SDGs とビジネスの講義の様子】



【CUの学生との学生交流の様子】



【CUの皆様との集合写真】

(文責：菌部)

【企業・機関】

アジア・大洋州三井物産株式会社

私たちは2月23日（金）に三井物産様のシンガポール支店（以下「三井物産様」と表記）を訪問しました。

最初に佐藤香織様（アジア・大洋州三井物産株式会社 人事総務部人事室 室長）より御講話をいただきました。佐藤様は過去に弁護士として働いていらっしゃいましたが、三井物産様への出向をきっかけに入社されました。三井物産様は「人の三井」と呼ばれているように、個人の仕事のやり方を見つけるよう入社時に伝えられることや、人事異動がしやすい環境を整えるなど、個性を尊重した社風、制度が充実していることを学びました。また、三井物産様は「その仕事は、自分たちがやるべきことなのか」と問い続けて、事業をする意味を明確にしてから行う点が特徴であると教えていただきました。最後に、三井物産様で働いている方は、社交的であることが共通点である一方で、考え方が一人一人異なっているというお話をいただきました。第33回FSP生にも得意不得意が異なるメンバーが集まりましたが、それぞれの強みややりたいことを尊重しあうことを重視し、全員が納得のいく活動ができるように努めてまいりました。チームワークではメンバーのことを知り、個性を活かすことがチームのために繋がるのだと気づきました。

次に、釘宮智樹様（アジア・大洋州三井物産株式会社 消費者ビジネス開発部門流通事業室 室長補佐）より御講話をいただきました。釘宮様は現在、消費者ビジネスの新規事業開発及び戦略企画、既存事業管理を担当されております。釘宮様は入社後LNGプロジェクトに携わることとなり、研修員として米国に赴任されました。その際、仕事の速さや集中力において長けている周りのメンバーから、多くの刺激を受けたとのお話をいただきました。印象に残ったのは、釘宮様の同僚の方が、仕事と家庭を両立するために仕事の効率性を重視していたというお話です。このお話から、自分が仕事を頑張ることができる理由を見つけることが、仕事をうまくこなすために必要な要素となることを学びました。また、若者は無限の可能性はあるもののいつかは無限を有限にする必要がある、つまりいつかは選択肢を絞らなければいけない、というお言葉をいただきました。そのためには色々な人の意見を聞き、その意見に対する自分の考えを逐一ノートに書き留めていくことで、自分の方向性が決まってくるというアドバイスをいただきました。この釘宮様のアドバイスとFSPの活動を通して、自分の経験を次につなげるためにはメモを残し、振り返ることが重要であるということを実感しました。

最後に、岡島文子様（Eu Yan Sang International Ltd（出向）、Senior Manager, Liaison Special Project Lead）より御講話をいただきました。岡島様は北海道大学の生命科学院にて、神経疾患について研究されていました。その後ご自身の持っている活力を人の為に使い、グローバルに働きたいという強い思いから、三井物産様に入社されました。現在は三井物産様の出資先である Eu Yan Sang International Ltd. というシンガポールの漢方薬製造販売企業に出向されています。岡島様は目標から逆算して働き方を考える「山登り型」キャリアではなく、その時にやりたい仕事をする「波乗り型」キャリアの考え方でお仕事されているというお話をいただきました。「波乗り型」キャリアは産休などで仕事をストップしてしまっても、自分のキャリアに穴を開けづらいという特徴

があります。キャリアと聞くと、「山登り型」キャリアのようにある先の目標を見据えて働くというイメージを抱きがちです。しかし岡島様のようにそのとき興味を持った仕事をするというのは、過去の自分が定めた道にとらわれることのない働き方だと思いました。また、自分が培ってきたスキルを発揮したい場所で発揮することができ、自分の長所を活かしやすかったです。どんな経験も必ず活かすというメッセージとともに、自分たちの将来の働き方について考えるきっかけとなる御講話でした。



【釘宮様の御講話の様子】



【御講話を拝聴するFSP生】



【釘宮様と岡島様との集合写真】

(文責：伊藤)

【企業・機関】

日本航空株式会社

私たちは2月24日（土）にシンガポールのチャンギ国際空港内にある日本航空株式会社シンガポール支店様（以下「JAL シンガポール支店様」と表記）のオフィスを訪問し、土橋健太郎様（日本航空株式会社 シンガポール支店長）、江島明代様（日本航空株式会社 海外基地客室乗員部シンガポール客室乗員室 室長）に御講話をいただきました。

土橋様は日本航空株式会社様（以下「JAL 様」と表記）に入社後、国際旅客販売業務グループや国際業務部マネージャーなどの様々な部門での勤務を経て、現在はシンガポール支店長を務めています。今回、土橋様からはJAL 様の経営戦略の1つである“他社との提携“について御講話をいただきました。JAL 様は初め、自社単独の業務を行なっていましたが、徐々にインターラインやコードシェアなど他社との提携を強化していき、現在では3大アライアンスの1つであるoneworldのメンバーとなりました。現在は共同事業という深化した提携を行うことでより良いサービスの提供に繋げているそうです。oneworldは加入している各会社の考え方や方針の共通性を重要視しています。JAL 様は信頼のおける会社との協力によって業務拡大に成功しているのです。このことから、信頼できる協力関係の構築は会社経営において大切なステップなのだと学びました。

また、JAL のアジア・オセアニア地区では日本人スタッフの方々ではなく、東南アジアの現地スタッフの方々が広報・宣伝活動に携わっています。これは日本と外国の価値観や常識が異なるため、現地の方々が行う現地のお客様向けのメッセージ発信の方が効果的であるためです。これはグループワークにおける適材適所の考えに通じていると考えました。

最後に、土橋様から「海外に実際に行き、人や町、空気を感じるべきだ」というアドバイスをいただきました。私自身も今回のFSPを通じて、研修先で異文化交流をすることができ、海外に行くことの重要性を体感しました。今後は海外留学などの機会を利用して積極的に海外に行き、新しい価値観を学びたいと思います。

江島様は客室乗務員や客室訓練部サービス訓練部教官などのキャリアを経て現在は海外基地客室乗員部シンガポール客室乗員室室長を務めています。江島様からは主に客室乗務員の仕事内容と仕事をする際の心構えについて御講話を頂きました。御講話を聞く中で私が大切だと感じたことはブリーフィングとデブリーフィング、確認会話の3つです。ブリーフィングはフライト前に仲間と短時間の打ち合わせをすることです。ブリーフィングを行うことで連携の強化やサービス方針の共有ができます。デブリーフィングは帰社後にその日の業務を振り返る作業です。ブリーフィングとデブリーフィングはどちらもチーム内で価値観や情報を共有する作業であり、グループワークを遂行する上で仲間との連携を上手に取るために重要な作業だと学びました。確認会話とは、伝達事項を詳細に伝える会話のことです。江島様は業務上のミスほとんどがヒューマンエラーによる情報伝達ミスだと仰っていました。そのため、確認会話は業務上のミスを減らすことにつながるそうです。御講話を聞く中で伝達不足や情報の齟齬を防ぐために、確認会話を日常生活にも取り入れるべきものだと感じました。

江島様の仕事をする際の心がけの中で最も興味深かったものはストレスマネジメントです。客室

乗務員はお客様の前で常に笑顔でいることが求められますが、笑顔でいるためには心の余裕が必要です。ストレスマネジメントを行うことで心に余裕が生まれ、笑顔を保つことができます。私は疲れている際に笑顔でコミュニケーションを取ることが苦手なので、これからはストレスマネジメントを実践して、笑顔で会話し続けることを心がけたいと思います。

今回、土橋様と江島様のお二方の御講話からは主に会社の経営戦略や働く際に心がけることを学びました。今回の御講話で得た、信頼できる仲間との協力の有用性やコミュニケーションを円滑にする方法などの学びをこれからの学習活動やキャリア形成の参考にしたいと思います。



【土橋様の御講話の様子】



【江島様の御講話の様子】



【土橋様と江島様との集合写真】

(文責：菅)

【企業・機関】

Institute of Molecular and Cell Biology

私たちは、2月26日（月）に分子生物学研究所様（以下「IMCB様」と表記）を訪問し、杉井重紀様（Principal Investigator, Institute of Molecular and Cell Biology）に御講話いただきました。IMCB様はA*STAR（シンガポール科学技術研究庁）傘下の研究所で、人間の病気の基本的なメカニズムを扱い、産学連携による研究開発を進めています。杉井様は、京都大学を卒業後、米国大学院で博士号を取得されました。現在は、IMCB様の研究員としてだけでなく、魚の培養脂肪を商業生産するスタートアップ企業 ImpacFat の創業者としても活躍されています。御講話では、海外大学院での経験と、研究・事業活動について御講話をいただきました。

杉井様は米国ダートマス大学で博士号を取得されており、その経験をもとに幾つか留学のメリットを教えてくださいました。英語でのコミュニケーション・プレゼンテーション能力が上がることや、様々な人種、国籍、経歴の方と学ぶことで広い知識や異文化への対応能力を身につけられること、自分1人で対応する力がつくことなどです。中でも、人脈が増えることが一番の大きなメリットだと仰っていました。留学をして優秀な人と知り合いになるだけでも価値があり、活躍している姿を見ると刺激を受け、モチベーションになるというお話をお伺いして、私も今回のFSPの経験と重ねて強く実感しました。このFSPで得られた繋がりを自分の活力にするとともに、今後は自分が刺激を与えられるような人になりたいと思いました。

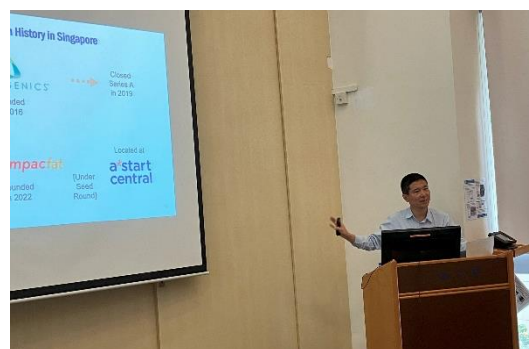
また、米国大学院進学は杉井様の脂肪研究のきっかけでもあります。大学院1年で脂肪に着目し、脂肪に関する研究が進んでいないことと、ポストドクターの際に行った脂肪研究の面白さから、研究を始められたとのこと。現在はシンガポールで魚由来の脂肪の培養について研究されています。シンガポールという地を選んだのは、培養研究と起業を推進しているからであり、魚由来の脂肪に着目したのは、先例がなく研究として面白いと感じたからだそうです。さらに、細胞培養により魚由来の脂肪を開発し食品として利用するために、2022年に ImpacFat を創立されました。新しいことに挑戦していく杉井様の姿勢から、自分はこれまで失敗を恐れて挑戦しないことがあったと気づきました。今後は、前例がないことや未経験のことにも積極的に取り組みたいと思います。

研究・起業のどちらも経験されていることから、アカデミアと産業研究の相違点と共通点についてお伺いしました。アカデミアと産業研究の異なる点として、アカデミアの研究は、すぐに結果が役に立つことは少なく、そのテーマにどれだけ興味があるかが一番大事であると仰っていました。結果がすぐに出ないことを続けるためには挫折があったとしても当初の目的や好奇心を忘れないことが大事だと思いました。今後のキャリアで長い間結果が出ない場合でも諦めずに取り組む考え方を学ぶことができました。共通点としてどちらも基礎研究が大事で、遺伝子の読み方や細胞について等まだまだ知るべきことが沢山あるとのことでした。また、人も重要で、チームとして協働し長期的に生き残っていくには、コミュニケーションが大事と仰っていました。私自身、研究は1人で黙々と行うイメージを持っていたのですが、法学など他の分野の方と協力する必要があると知り、研究においてもチームワークは必要かつ重要なことなのだと学びました。

御講話から杉井様が御自身の研究に対して好奇心と熱意をもって取り組まれていることを感じました。大学院での苦労や研究者になられてからの取り組みをお聞きして、自分がやりたいことや成果の裏には、挫折や努力はつきものであると再認識しました。また、杉井様が留学先や研究室で人を大切にしていることをお聞きして、自分たちも FSP で出会った仲間やこれまで、これからの出会いを大切に生きていきたいと思いました。



【杉井様に質問する FSP 生】



【杉井様の御講話の様子】



【杉井様との集合写真】

(文責：中村)

シンガポール国立博物館

私たちは2月25日（日）にシンガポール国立博物館を訪問しました。現在シンガポールがある地域は、マレー半島先端という東洋と西洋を結ぶ航路上に位置しています。そのため、古代から様々な国の船舶が往来する港湾都市として栄えていたことを学びました。また、イギリスの植民地時代から日本占領時代、マレーシア連邦から独立して今日のシンガポールに至るまでの歴史についても学びました。

博物館では、昔のシンガポールの人々が生活の中で使用していた道具のサンプルを見ることができました。実際にサンプルを見ることで、容易に当時の人々の生活を想像することができました。また、1800年代のシンガポールの人々の生活の様子と、今日のシンガポールの人々の生活を比べてみることで、シンガポールが著しいスピードで発展してきたのだと改めて感じました。

博物館を訪問して最も感じたのは、私たちは自分の国の歴史に対する理解が浅いということです。博物館に展示されていた日本のシンガポール占領の歴史については、初めて見る内容がほとんどでした。これまでは、学校の教育や日本側の視点のみで歴史を理解したつもりになっていました。しかし、博物館で自分が知らない歴史の一面があることを知り、自分から被害者側やマイノリティ側の視点を積極的に理解しようとする姿勢を持つことが必要なのだと感じました。



【Rickshaw (人力車) の模型】

(文責：仲村渠)



【シンガポール陥落の際のポスター】

【自主学习】

ここでは、FSP 生がシンガポールの自主学习で得た学びや気づきを紹介します。

リトルインディア（文責：北谷）

シンガポールは多民族国家だと事前授業で聞いていましたが、駅を降りた瞬間にインド系の人が多くなっていて、別の国に来たような気分になりました。道には露店が軒を連ねて、サリーやヒンドゥー教の神様の像などを売っていました。ホテル周辺の高層ビル群とは違い、カラフルに彩られた背の低い建物が密集していました。リトルインディアの後にはチャイナタウンに行きましたが、また違った街の様子が見られました。それぞれの文化を互いに尊重したことによって、一つの文化で都市が統一されるのではなく、このような場所が作られていることに気づきました。文化を消すのではなく、このような共存の仕方があることに気づきました。



【リトルインディアの様子】

プラナカン博物館（文責：鈴木）

マレー文化、中国文化、欧州の文化などが折り混ざってできたプラナカン文化について深く学ぶことができました。食器に関してはピンクや水色といったパステルカラーが基調になっており、可愛らしかったです。織物やアクセサリなどはとても細かい模様や細工が施されており、人手で作られたものとは思えないほどでした。面白かった点は、文化の混ざり方が展示物によって異なっていたところです。例えば、洋風の形に中国系の模様が施されている椅子や、どの文化とも特徴づけるのが難しい柄のサンダルなどがありました。また衣服はマレー系の要素が強いものや、中国系の要素が強いものなど、1つの文化の中でも多様性がありました。(写真は腰当てだと思われます。洋風柄の布地に仏像のようなものがついていました。文化の融合がよく分かります。)



【プラナカン博物館の展示物】

セントーサ島（文責：上村）

これはセントーサ島というシンガポールの南にある離島で、スカイヘリックスというアトラクションに乗った時の写真です。スカイヘリックスから見たシンガポールの街並みは改めて私たちにシンガポールの発展具合を認識させました。またシンガポール海峡に多くのコンテナ船の往来を見ることもでき、古来からシンガポールは貿易のハブであるということが実感できました。実はこのスカイヘリックスに乗るのに自分たちの不手際で1時間半以上時間をロスしました。チケットの予約ができておらず、従業員さんの方に色々とお説明をしていただいたのですが、英語でのやり取りがうまくいかず、時間がかかってしまいました。あらゆる場面で事前準備と英語力が大事だということを痛感しました。



【スカイヘリックス体験中の様子】

マレーシア

※以下、敬称略

研修に協力してくださった方々一覧

振り返りミーティング

【教育機関】

Management & Science University

Universiti Putra Malaysia

【企業・機関】

三菱商事株式会社

イオンマレーシア

世界銀行マレーシア事務所

マレーシア国立博物館

【自主学習】

研修に協力してくださった方々一覧

ここでは、第33回FSPのマレーシアの研修の際に協力してくださった方々のお名前とご所属を記載させていただきます。学生の方々は、クラブ名のみ記載しております。

研修先（敬称略）	お名前（ご所属）
Management & Science University	<ul style="list-style-type: none"> • Ms ChM. Eva Tan Lee Yin (Director Global Affairs, Management & Science University) • Mr. KHAIRUL ANUAR REZO (Senior Lecturer Department of Business Management & Law Faculty of Business Management & Professional Studies, Management & Science University) • Student Volunteers (International Club)
Universiti Putra Malaysia	<ul style="list-style-type: none"> • Dr. ZALINA ABU ZAID (Senior Lecturer / Dentitian Department of Nutrition and Dietetics Faculty of Medicine and Health Sciences) • Dr. SYAFIQAH RAHAMAT (Senior Lecturer Department of Dietetics Faculty of Medicine and Health Sciences) • Student Volunteers (Foodnatic Club)
三菱商事株式会社	<ul style="list-style-type: none"> • 保坂 親廣 様 (三菱商事株式会社 クアラルンプール支店エネルギーソリューション部長) • 白石 雅資 様 (三菱商事株式会社 マレーシア総代表 クアラルンプール支店長) • 田邊 尚子 様 (三菱商事株式会社 クアラルンプール支店業務部 シニアマネージャー)
イオンマレーシア	<ul style="list-style-type: none"> • 松原 孝和 様 (イオンマレーシア Senior Manager Information Technology)
世界銀行マレーシア事務所	<ul style="list-style-type: none"> • 松田 康彦 様 (World Bank Country Manager for Malaysia)
マレーシア国立博物館	<ul style="list-style-type: none"> • マレーシア国立博物館日本語ボランティアガイドグループの皆様

(文責：仲村渠)

振り返りミーティング

日時：2月28日（水） 8:30-12:30

場所：Hotel Royal Kuala Lumpur

研修期間のちょうど折り返し地点となる7日目に行われた振り返りミーティングではメンバーが一人ずつ事前学習、およびシンガポールでのグループ活動や個人活動についてや自分自身の気づきについて1人4~5分で発表し、チーム全体に共有しました。コミュニケーションについて、英語についてなど、31人のチームメンバーの気づきは31通りあり、1つとして同じものはありませんでした。全員がメモを取り、活発に質問が飛び交いました。自分では見つけることがなかった気づきを得ることが出来たのは、残り半分となった研修を有意義なものにするための大きな助けとなったと思います。特に大きく変わったのは、チームに対する意識です。事前学習、シンガポールでの研修を通じて多くの方が31人という大人数で動く難しさを痛感しました。そこで主体的にチームのために行動するには、チームを自分事としてとらえることが大切だと気づくことが出来ました。この気づきをもとに後半では、チームでの行動ではリーダーに限らず、積極的な声掛けが行われ、ひとりひとりがチームのことを考えられるようになりました。

最後には川端先生、井上先生、引率補助として同行して下さった佐々木さんのお言葉もいただき、チーム一同、気持ちを新たにすきっかけとなりました。



【気づきを発表するFSP生】

(文責：小野塚)

【教育機関】

Management & Science University

私たちは、2月29日（木）に Management & Science University（以下「MSU」と表記）を訪れました。MSUはマレーシアセランゴール州に位置し、医学、健康科学、経営学、情報科学、工学を中心に、様々な実学的な分野を教えています。特筆すべきは学生起業家になるための支援の豊富さであり、他大学と比べ実社会で必要となるスキル習得のためのカリキュラムが充実しています。また、全校生徒の約3割は留学生であり、アジア・アフリカなど56か国の学生がともに学んでいる、インターナショナルな大学でもあります。

到着後、オープニングにて両大学のあいさつ及びMSUの大学紹介を受け、Mr. KHAIRUL ANUAR REZO (Senior Lecturer at Department of Business Management, Faculty of Business Management & Professional Studies, Management & Science University) による International Business & Cultural Communication の御講義を受講しました。本講義では、「国境を越えるすべての取引」というインターナショナルビジネスの定義から始まり、グローバリゼーションの意味、各国の政治・経済の形態まで幅広いトピックを学びました。その中で、特に印象に残ったのはグローバリゼーションの項目です。それまでグローバリゼーションという言葉には、ビジネスや交流が世界的に行われるという大まかなイメージしか抱いていませんでした。しかし本講義を通して、グローバリゼーションが文化や嗜好の世界規模での融合であること、私たちが正にグローバリゼーションの過渡期に生きているという現状をまざまざと実感しました。同時に、グローバリゼーションの時代において、文化の融合とは一体化ではなく共存であり、その一つ一つを尊重すること必要だとも感じました。そのために、自分の価値観を人に押し付けるのではなく、様々な国の文化を理解し、多様な視点から物事を捉える姿勢を保ち続けようと思います。

講義の後、キャンパスを留学生の方々に紹介していただきました。ツアーを通して、北海道大学をはじめとする日本の大学とMSUの違いに度々驚かされました。特に印象に残っている違いは2つあります。1つは芸術に関する学部の存在です。事前学習の段階では、MSUに対し、経済や科学といったイメージを強く抱いていました。しかし、実際は美容やヘアケア、ファッションなど芸術的な学部も多く、意外性を感じるとともに、芸術をマネジメントと繋げて職業にするという考え方に深く感銘を受けました。日本の大学では分野ごとの専門知識のみを勉強することが多いですが、社会に出た後に大学での知識だけでは役に立つかは分かりません。ただ専門知識を身に着けるだけではなく、専門知識を具体的に社会に役立てるという観点から、自分が学んでいる学問について捉えなおすことが重要だと感じました。もう1つは、図書館の機能についてです。MSU図書館内部には昼寝をする部屋や、作業や工作、カラオケをする部屋など、様々な用途の部屋が存在していました。ロビーには生徒が描いた絵画が飾られており、ディスカッションをするスペースもたくさんありました。図書館がただ本を読む場所ではなく、生徒が気軽に集まれる場所として機能している様子がすごく新鮮に感じました。

キャンパスツアーを終えた後は学生と昼食を取り、School of Hospitality & Creative Arts（以下「SHCA」と表記）に所属する学生の方々とマレーシアの伝統楽器を体験させていただきました。

昼食では現地の学生と趣味やスポーツの話で盛り上がり、連絡先を交換するほど親交を深める事ができました。楽器体験では、マレーシアの楽器に各々挑戦しました。SHCAの皆さんが丁寧に教えてくださり、最後には日本人学生たちで1曲演奏することができました。楽器の演奏はとても楽しく、また研修後もメロディーを口ずさむFSP生もいました。この経験から、言語でのコミュニケーションが円滑にできなくても、音楽を通して「楽しい」という気持ちを共有することができるということに気づきました。

MSUでの研修を通し、文化や言語が違っても、私たちは互いを理解し心を通わせられるということを実感しました。今後は、言語の壁に怖気づかず、音楽や食事といった文化からも相手の心を理解しようとする姿勢を持ち、他者とのコミュニケーションを行っていきたいと思います。



【楽器を練習するFSP生】



【Mr. KHAIRUL ANUAR REZOの御講義の様子】



【MSUの皆様との集合写真】

(文責：瓦田)

【教育機関】

Universiti Putra Malaysia

私たちは、3月4日（月）にUniversiti Putra Malaysia（以下「UPM」と表記）を訪問しました。UPMは1931年に創立された農林学部、情報技術学部、工学部、教育学部など15の学部と11の大学院からなるマレーシアの国立大学です。

最初にオープニングセレモニーが行われ、その後UPMの説明が行われました。UPMは1つの敷地内に多くの学部が集まって共同研究を行っており、複合分野の問題解決に強みがあると感じました。続いて、Foodnatic clubの方の紹介が行われました。Foodnatic clubは栄養学部にも所属する学生が主に参加しています。クラブ活動で日本の企業である「味の素」に見学に行くなど精力的に活動しています。クラブ紹介のプレゼンテーションでは発表に緊張が見られず、場慣れしていました。その姿に刺激を受け、プレゼンテーションがある授業を積極的に受講して、発表に慣れていこうと思いました。その後、UPMの上級講師の方々からマレーシアの特徴について御講義いただきました。マレーシアには40以上の民族と200以上の準民族が住んでいて、多様な文化が存在しています。それぞれの民族が互いを尊重しあうことで、いがみ合うことなく生活していることを学びました。このことからマレーシアは「colorful」と仰っていました。40以上の民族が互いを尊重しあっているマレーシア社会は、これから先の民族の多様性を認める社会が目指すべき姿だと強く感じました。また、マレーシアの食生活についても御講義いただきました。そこでは、国の文化を知るには、その国の食生活を理解することが大切な要素となることを学びました。例えば、マレーシアに辛い食べ物が多いのは、香辛料貿易の中継地であった歴史が関係していたこと、また食品にハラール表示があることは、特定の宗教徒だけではなく、さまざまな宗教を持つ人が一緒に生活しているということが分かりました。このように、食生活はそれぞれの国の特徴を知る大きな手掛かりとなることに気が付きました。

次に、現地の学生達とマレーシアの伝統的な建物の中で昼食をいただきながら交流を行いました。伝統的な高床式の建物は外気温と比べ涼しさを感じることができ、今まで学んだ知識を実体験で確かめることができました。現地の学生とお互いの国の文化について話しながら素手で食事をした経験は、異文化を肌で感じる事ができた貴重なものでした。

次に、UPMの附属病院の見学をしました。UPMの医学部は病院での実習を行っており、学生専用の実習室の存在や病院での研修など医師になるための環境が整っていることを知りました。また、医療スタッフが待機しているステーションから病室までの距離が近いことや、ガラス張りの窓を通して病室が外から見通せるようになっていることなどから病院の作りが日本と違うことに気づきました。加えて、病院内にある患者の栄養管理をサポートする診療所を見学することで、マレーシアの食生活と健康状態の関連性について学ぶことができました。マレーシアは東南アジア圏10カ国で最も肥満人数が多い国であり、その原因は人々が忙しくて外食をよく行うことと、気温が高いため外を歩きたがらないことです。私たちが見学した診療所がそのような食生活を改善するために存在していることを知って、人々の食文化はその国の医療のあり方にも関わっていることを実感し、日本との違いが生まれる背景についても学ぶことができました。

最後にクロージングセレモニーが行われました。クロージングセレモニーではUPMの生徒にマレーの伝統的な歌と踊りを披露していただき、FSP生も教えていただきながら一緒に踊りました。話す言語も、服装も異なる2カ国の生徒が同じ踊りを行ったあの空間はまさに異文化交流そのものであり、異なる文化を持った人とも感情を共有できるという実感を得ることができました。

UPMでの経験を通して、私たちは多文化国家での文化について実感し、現地学生と仲良くなることで国際交流のハードルが想像より低いということに気づきました。また、異なる文化の人々が互いを尊重しあうことで、多様性を寛容する社会が実現できると感じました。



【UPMの授業受講の様子】



【UPMの学生との昼食の様子】



【UPM附属病院見学の様子】



【UPMの皆様との集合写真】

(文責：北谷)

【企業・機関】

三菱商事株式会社

私たちは、2月28日（水）に三菱商事株式会社 クアラルンプール支店様（以下「三菱商事様」と表記）を訪問し、保坂親廣様（三菱商事株式会社 クアラルンプール支店エネルギーソリューション部長）から御講話をいただきました。また、支店長の白石雅資様（三菱商事株式会社 マレーシア総代表 クアラルンプール支店長）と田邊尚子様（三菱商事株式会社 クアラルンプール支店業務部 シニアマネージャー）にもご参加いただき、特にFSP生からの質問へのご回答にご協力していただきました。保坂様からは主に業務について、また、ご自身のキャリアについてご教授いただきました。

業務について、保坂様は入社後、主に LNG（液化天然ガス）事業に携わっていたとお伺いしました。御講話の中で、調べてみただけではわからない商社のスケールの大きさを感じたと同時に、どのような困難が伴うのかも知ることができました。ベネズエラで事業が頓挫したお話を聞き、その失敗を活かすのが三菱の強みだということと、失敗をした時に起きてしまったこと、仕方がないと腹を括り冷静に対処することが大切だということをご教授くださいました。失敗との向き合い方に悩んでいる人は多く、自分自身も失敗した時に、たればばばかり考えてしまい、失敗を長く引きずってしまったり、失敗の責任は他の人にあると言い聞かせてしまったりすることがあります。そのようにならず、失敗と向き合い、活かす方法を知ることができたのは大きな学びとなりました。

三菱商事様が取り組んでいる CSR 業務についてもお話していただきました。三菱商事様は熱帯雨林再生プロジェクトや奨学金制度の実施など多岐にわたる CSR 事業を行っており、その根幹には、企業は社会の一員であり、積極的に社会貢献しなくてはならない、という考えがあることを知ることができました。御講話を通じて利益を求めるのではなく、心から世界と向き合っている姿勢を感じ取ることができました。複雑な問題に溢れる現代社会では持続可能性が重要であり、目先の利益に囚われて事業を始める場合、新たな問題が生じる恐れがあると感じました。事業を始める際にはまず何らかの問題解決などの目的があり、その目的を達成する中で利益が生まれるという形が望ましいのではないかと考えました。

また、海外で働く際の異文化理解の重要性を感じました。御講話の中で、海外で働く上で相手が持っている文化、価値観に自分をマッチングさせることが大変であるというお話があり、その大変さを強く感じました。事業は政治に左右されるため、先ずは行く国の政治を理解する、ムスリムの方のラマダンの際には目の前で食事をする事は避ける、など、あらゆる場面で異文化に対して自分に対応を変化させていくことの重要性を知ることができました。異文化を理解するという事は重要だという価値観は持っていないわけではなかったのですが、ずっと日本に留まっていた私は異文化に関わる機会があまりなく、正確に異文化理解の重要性は理解していなかったことにも気づきました。

保坂様のキャリアについて、三菱商事様を選んだきっかけをお伺いしました。大学時代からエネルギー関連に興味があり、エネルギー事業の強い三菱商事を選ばれたとのことでした。大学時代、ゼミでクリーンなエネルギーの話題を取り扱っていたと仰っており、大学時代に自分の興味のある

分野について触れていることが強みになるのだと感じました。また、経済学部出身である保坂様に、理系分野についての知識が乏しい文系出身の方がどのようにすれば理系分野の知識が必要な場面で会社に貢献できるのかについて質問させていただいたところ、「文系が理系に比べて専門知識がないのは仕方がない。現場を見ること、現場で学ぶことを優先すべき。」と説明してくださいました。また、白石様も「入社後の研修で学ぶことは多い。そこまで心配することはない。」と仰っていて、自分が携わることになった分野についての専門知識があまりない場合、もしあったとしても、働いていく中で会社に貢献するには、現場に対する理解度を可能な限り高めるということが重要だと理解しました。文系の私は、就職後に理系出身の方と同程度の仕事ができるのが心配でしたが、就職後の努力でどうにかすることは可能であり、そのために学びを続けていくことが重要なのだと感じました。

三菱商事様での御講話を受けて、海外で働くことの難しさ、失敗との向き合い方、異文化理解、現場の理解の重要性を学びました。一人一人違うキャリアプランを持っていますが、各々のキャリアプランの実現に際し、大きな手がかりとなるお話でした。私たちはこれから身近に始められることとして、小さいことでも何か失敗した時に、その失敗を受け入れ、割り切って次に進む事を心がける、自分と違う文化、価値観を持っている人と出会った時には自分の方から歩み寄る姿勢を持つことなどから取り組んでいこうと思いました。



【質問をする FSP 生】



【白石様と FSP 生の質疑応答の様子】



【保坂様と白石様との集合写真】

(文責：上村)

【企業・機関】

イオンマレーシア

私たちは3月1日（金）にイオンマレーシア（以下「イオンマレーシア様」と表記）の松原孝和様（イオンマレーシア Senior Manager Information Technology）に御講話を頂き、その後実際に店舗を見学させていただきました。

イオンマレーシア様は、マレーシア国内での百貨店、スーパーマーケット、薬局などの小売りチェーンの経営および運営を行っており、またそれらの店舗を利用したパーソナルショッピングサービス（顧客の趣向や目的に合わせた買い物をサポートするサービス）や宅配サービスを提供しています。日本でも多く見かけるイオンですが近年はマレーシアや他海外への進出も目覚ましく、それぞれの国の文化や宗教などへ配慮しながら「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する」という基本理念のもと事業を拡大しています。

御講話では松原様から、イオンマレーシア様の企業概要だけでなく、ご自身の人生経験から海外でのキャリア形成について伺いました。また、御講話の後には店舗見学があり、イオンマレーシア様が行っているインターネット事業”Eコマース”（店頭の商品を家にいながら購入できるサービス）について現地の社員の方々の実務を見学させていただき、疑問点などを英語で伺うことができました。昔から漠然と海外でのキャリア形成へ憧れを持っていた松原様は大学卒業後プロサッカー選手を目指して渡米しますが、翌年にそのキャリアを変更されました。しかしその後も青年海外協力隊への参加や、フランスでの語学留学を経て2007年にイオン株式会社に入社されました。初めは国内の店舗で勤務し、海外では、店舗・本部での業務を歴任されており、2017年からは海外（カンボジア、マレーシア）で勤務されています。松原様は主にEコマース事業を担当し、東南アジアでの物流のデジタル化に大きく貢献されています。

御講話の中で特に印象的なお言葉は、「過去の体験が現在の価値観に大きく影響しており、相手のバックグラウンドを理解しようとする姿勢が大切だ」です。マレーシアは多民族国家であり、ハラルやラマダン等食文化にも多くの宗教的特色が見られます。イオンマレーシア様はそれらの多様性にできる限りの配慮をしており、具体的にはメイン売場が全てハラルで、少し離れたところ（日本のスーパーでいうとパン屋や花屋のようなコーナー）にノンハラルの食品が並べられていました。ムスリムが多数派であるマレーシアならではの光景だと思います。文化が多様であることは、制約が多くて難しいことばかりではなく、その分お祝いやイベントなどもたくさんあります。例えばチャイニーズニューイヤー、ハリラヤ、ディパバリなどです。また、相手を理解しようとする姿勢は松原様自身の考えにも通ずるところがあると見受けられ、その例として松原様は現地の言語をとっても重視されていました。実際、カンボジアへ赴任されたときは、現地の文化に溶け込むためにカンボジア語を学び、できる限り会話の中に用いることでより密接なコミュニケーションを取られていたそうです。このように、文化、宗教などの違いを単に障壁としてでなく、相手を理解し仲を深める1つのきっかけとしてポジティブに捉え、実際に行動する姿が私たちにとって新鮮で、感銘を受けました。このような姿勢は、松原様個人の豊かな人間性だけでなく、イオングループ全体が各国へ展開していく際の柔軟な経営戦略の礎になっていると思いました。

御講話の後は実際に店舗を案内していただき、松原様が担当されている E コマース事業の実務を見学させていただきました。現地の従業員の方と英語でいくつか質問させていただいた中で、この事業がコロナ禍に生まれたもので、即日配達と生鮮食品の取扱いが人気の火付け役となったことや、この事業を通じてデジタルとリアルを融合することでお客さまの満足度の最大化を図っていることなどを教えていただきました。

イオンマレーシア様の研修の中で、御講話からは松原様の行動力や相手を知ろうとする姿勢を学び、店舗案内からはイオングループの国際的な発展を支えるホスピタリティと、それを実行するスタッフの皆様のお声を聞くことができました。いずれも私たちにとって新鮮で有意義であり、将来のキャリアをデザインしていく大きなきっかけとなりました。



【松原様の御講話の様子】



【E コマースの説明を受ける FSP 生】



【イオンマレーシアの皆様との集合写真】

(文責：原田)

【企業・機関】

世界銀行マレーシア事務所

私たちは、3月5日（火）に世界銀行マレーシア事務所（以下「世界銀行様」と表記）を訪問し、松田康彦様（World Bank Country Manager for Malaysia）による御講話をいただきました。世界銀行様は現在、「Ending extreme poverty by 2030」を掲げ、最貧国への資金援助、技術援助、政策助言を行っています。これらの活動を通し、均衡の取れた経済成長を目指すだけでなく、気候変動に対する融資も積極的に行うことで、人類の長期的な発展、繁栄を目指しています。

今回訪問したマレーシア事務所は、マレーシア政府が誘致し、2015年に開設されました。世界銀行様はマレーシア政府に対し、資金援助を行っているわけではなく、技術援助と政策助言を行っています。開発投資を行う組織が民間でも登場する中で、世界銀行様は専門家の豊富さを強みとし、問題解決のため、様々な原因ごとのアプローチを考えています。この点から、自分の強みや、他者との違いを分析し、自分の強みを生かせる部分を見つけて取り組んでいくことが必要であると気づきました。

松田様の学生時代、そして世界銀行様でのキャリア形成について御講話をいただきました。大学生時代のアメリカでの交換留学を機に、自分の力を世界で活かしていきたいという思いから、海外で働くことを考え始めたそうです。そして、就職した世界銀行様では YPP（Young Professional Program）と呼ばれる各国の優秀な若手職員が参加するプログラムに参加し、それが現在のキャリアの基礎となっていることを伺いました。このお話から、たとえ困難な道であるとわかっていても、新たな気づきや出会いがあり、それが後のキャリアにも繋がっていくことがあるため、まずは挑戦してみることに、第一歩を踏み出すことが大切であると学びました。

松田様の御講話の中で、世界銀行様では、求められる人材像を表す際に T 型のモデルを使用しているとお聞きしました。T 字の縦軸に当たるのは特定の分野における深い専門性（Technical Depth）であり、2 本の T 字の横軸は、それぞれ、① Technical Breadth と、② Client Engagement and Team Skills です。① の横軸では開発全体を広い視点で理解するために、縦軸にあたる深い専門性を支える他分野に渡る知識が求められていることを示しています。さらに、② の横軸は、互いの文化、価値観の違いを尊重し、相手と信頼関係を構築しつつ、共通の目標に向かって関係者をまとめていく能力が求められていることを示しています。特に重要なものは T 字の縦軸の部分である深い専門性であり、世界銀行様ではこの深い専門性を持つ方の豊富さが強みであるとお聞きしました。御講話から深い専門性は一朝一夕に身につくものではないため、大学生という「学び」に存分に時間をとることができるこの時期にこそ、幅広い知識を習得し、それを土台として自分の専攻、興味のある分野の学びを深め、自分がこの分野なら誰よりも詳しいという武器を作っておくことが重要だと感じました。残りの学生生活では、自身の専門分野に関してしっかりと理解、習得に努めることで自分自身の「強み」を作っていきたいと思います。

今回の世界銀行様への訪問、そして松田様の御講話を通して、これからのキャリアを築いていくにあたり、以下の2つの気づきを得ることができました。まずは機会を見つけて困難に関わらず挑戦し、自分に与えられたチャンスを最大限利用すること、大学生という深い学びを得ることのでき

る立場を最大限に生かすことです。この気づきを大切に、今後の学生生活やキャリアの構築に生かしていきたいと思います。



【松田様の御講話を拝聴するFSP生】



【松田様の御講話の様子】



【世界銀行の皆様との集合写真】

(文責：星野)

マレーシア国立博物館

私たちは3月2日（土）に、マレーシアの歴史や文化について学ぶためにマレーシア国立博物館を訪問し、ボランティアの日本語ガイドの方に館内を案内していただきました。マレーシアは四大文明の1つである中国とインドの中間地点であること、モンスーンの風の交差点であることから東西貿易の中間地点として発展していきました。そのため、東西の様々な文化が入り交じりマレー系、中華系、インド系をはじめとする200以上の民族が共存しています。また、太平洋戦争時代には日本軍によって統治されていたことも学びました。

博物館では植民地時代の歴史を、マレーシア側からという新たな視点で学ぶことができました。日本では植民地化は悪いこととして捉えられることが多いように感じますが、ヨーロッパの介入によって交易が盛んになったり、西洋の技術が導入されたりと悪い面ばかりではないと気づきました。同じ物事でも語る人によって様々な捉え方があることがわかりました。よって、より深く理解し、学びを得るためには多くの視点からの情報を得ることが必要だと実感しました。



【マレーシア国立博物館での集合写真】

(文責：田村)

【自主学习】

ここでは、FSP 生がマレーシアの自主学习で得た学びや気づきを紹介します。

プトラモスク（文責：玉本）

訪問した際、日本語を話せる現地のボランティアの方にピンクモスクについて、またイスラム教についてご解説いただきました。そこでは、特にイスラム教について事細かなところまで知ることができ、新たな学びとなりました。例えば、ラマダンの時小さな子供は完全に断食するのではなく、徐々に食事の間隔を開けて慣れさせてから、大人と同じく断食できるようにする、といった教科書に載っていないことまで教えていただいたことが、とても印象に残っています。また、このモスクはお祈りをするだけの場所ではなく、他宗教の人に対してイスラム教を知ってもらおう場所でもあったように、様々な役割を果たしていることを新たに知ることができました。日本に住んでいると宗教について考える機会はどうしても少なくなってしまうので、非常に貴重で興味深い経験となりました。



【プトラモスクの内観】

バトゥ洞窟（文責：中村）

バトゥ洞窟はヒンドゥー教の聖地と言われています。マレーシアはイスラム教徒の方が多くいますが、多民族国家でありヒンドゥー教徒の方は6%を占めます。クアラルンプール市ではヒンドゥー教徒の方をあまり見かけませんが、バトゥ洞窟では沢山の教徒の方を見ました。ヒンドゥー教徒の方はごつごつした道を裸足で歩いていたことが印象的でした。入り口にある巨大な「ムルガン」の像や、272段の洞窟へ続く階段、4億年前にできたといわれている鍾乳洞など、どれも新鮮で刺激的でした。バトゥ洞窟の外や中にはカラフルな仏像が沢山あってヒンドゥー教の雰囲気に触れ、多神教であることを実感しました。



【バトゥ洞窟前の広場の様子】

KL フォレスト・エコ・パーク（文責：世古）

クアラルンプールはインフラが進んで高層ビルや商業ビルが立ち並ぶ、マレーシアの著しい経済成長を体現したような都市のイメージがありました。しかし、この写真からも分かる通り高層ビルのすぐ隣にはジャングルのような熱帯雨林が広がり、同じクアラルンプールとは思えないほどの大自然が存在していました。一見、都市化が進んだように見えるクアラルンプールには、実は都市と自然という相反するものがコントラストとして混在しているのだという事に気付かされました。



【KL フォレスト・エコ・パークと高層ビルの様子】

事後活動

第1回事後授業

第33回 FSP 受講生の声

第1回事後授業

日時：3月5日（火） 13:00-17:00

場所：Hotel Royal Kuala Lumpur

3月5日（火）、海外研修中の最後のプログラムとして、川端先生、井上先生の両担当教員と引率補助の佐々木さん、第33回FSP生の31人で第1回事後授業を行いました。この授業では1人1人が発表する形式がとられ、各々4分の時間が与えられました。その中で、FSPにおいてに取り組んだことを最大3つ、そしてそれらがFSPの目標である「マネジメント能力・コミュニケーション能力・チームワーク力・国際理解・グローバルな世界でのキャリア形成」とどう結びついているのか、気づきと成果を述べ、最後に自らのFSPへの取り組みに対しての自己評価点を発表しました。

同じ生活、同じプログラムを受けた者同士での発表であったにもかかわらず、多種多様な課題や気づきが浮かび上がりました。具体的に発表の中で出た気づきを挙げると、「文化多様性、食の安全性、キャリアの方向性」などがあり、その中でも特にコミュニケーションの面について触れているメンバーが多くいました。メンバーの振り返りを聞いて、チームが全体としてまとめ、共通の方向性をもって動くには綿密なコミュニケーションによって認識の一致を図る必要があると実感しました。

授業の最後に、佐々木さん、井上先生、川端先生からそれぞれ総括をいただきました。私たちより一年前にFSPを経験した佐々木さんからは、FSPの活動を通して得た後悔と反省を次に繋げるにはどうするか、御講話や大学での交流以外にも事前学習、先生や支援生の方々、チームメンバーから学べる事をもっと見つけてほしいということ伺いました。また、井上先生からは「虚心坦懐」の精神をもってコミュニケーションに臨んでほしいというお言葉をいただきました。最後に川端先生から、「人は財産」「Learning by Doing」という二つのお言葉をいただきました。「人も情報も自分で待っているだけではやってこない。自ら人との関係性を構築し、自分の可能性を引き出してもらおう。講義を聞いて頭で学ぶだけでなく、行動に起こさなければ何もつながらない。」と事後授業を通して、FSPで得られた課題・成果を次につなげることの重要性をご教授いただきました。それぞれの気づきを共有することで、新たな視点からの学びを得るだけでなく、個人、チーム全体の課題に対して改めて向き合うことができました。



【気づきを発表するFSP生】



【質問をするFSP生】

(文責：鎌田)

第33回 FSP 受講生の声

ここでは、第1回事後授業で発表されたFSP生の学びを項目別に分けてまとめています。第33回FSP生の学びが読者の皆様の参考になれば幸いです。本項目を執筆するにあたり第1回事後授業の議事録を参考にしました。

チームワーク・グループワーク

- ・チーム全体としてより良い関係構築をできるようにするために、報告、連絡、相談というコミュニケーション方法の3要素である報連相の重要性を認識した。
- ・些細なことでも報連相を意識するようになった。
- ・分からないことがあったら、周りのグループメンバーに聞いてみたり、直接聞いてみたりすることで情報の共有をできるようにした。
- ・お互いが相手のことを尊敬し、「真似したい」と思えるのが良いチームだと気付いた。
- ・チームの一員として当事者意識を持つことが大切だと感じた。
- ・事前課題を進めていくうちに信頼関係構築がされ、渡航中の円滑なコミュニケーションにつながった。
- ・相手のことを考えると、耳が痛くても正直なフィードバックをした方が良いと気付いた。
- ・言いたいことやわからないことは積極的に言うことで共通認識が生まれ、活動がスムーズに進む。
- ・自分だけで進めるのではなく、グループメンバーと協力することが大切だと思った。
- ・一人で活動するだけではわからない楽しさや難しさを感じた。
- ・グループメンバーとコミュニケーションを重ねることで、相手のポテンシャルを引き出すことができる気付いた。

キャリア

- ・キャリアプランを考える上で、自分のやりたいことを見つけるということが重要だと感じた。
- ・様々な方の御講話や御講義を聞き、自分のキャリアにおける視野を広げることが出来た。仕事につなげることばかり考えず、大学でしか出来ない学びを追求することもキャリア形成において大切だと認識した。
- ・就職がゴールだと思っていたが、就職してから新たなキャリアを形成した方々の話を聞き、仕事の中でも自分の興味関心を見つけていこうと思った。
- ・海外でのキャリアを近く、具体的に感じる事が出来た。
- ・自分が置かれた環境の中で最大限努力することも大切だと思った。

コミュニケーション

- ・学びに生かすために、情報を受け取るだけでなく、自分で考えて抽出することが大切だと思った。
- ・共有しよう、認識のずれをなくすために口頭だけでなく文章化することが必要だと感じた。
- ・自ら話しかけなければ、状況を変えることはできないということに気付いた。
- ・何気ない会話や些細な会話を大事にすることで、相手を知ることができるということに気付いた。
- ・挨拶、返事、感謝、謝罪など人としてのマナーを守ることで、チームとして動きやすくなる。
- ・コミュニケーション能力は誰とでもいい雰囲気ですで話せることだけでなく、自分の意見を正確に相手に伝え、相手の意見を正確に掴み取る能力。
- ・自分が考えていることを伝えることと、相手の話を聞く力も必要であると感じた。

英語力

- ・思ったことが話せず、結果的に黙ってしまい、コミュニケーションが取れなかったため、学校ではあまり学べないスピーキングの重要性を改めて認識した。
- ・英語の基礎である単語力をつけたいと思った。
- ・コミュニケーションの基礎として最低限リスニングが出来ることは大切。
- ・英語を話す楽しさを知った。渡航の後半では、自分から話すこともできた。

多文化理解

- ・ハラルフードや様々な宗教への配慮など、民族国家ならではの工夫を知ることが出来た。
- ・食事や民族的な場所にいくことで、多種多様な文化を理解することができた。
- ・小さなお店でも多言語に対応していた。
- ・文化が異なる人同士でもお互いを理解し、尊重し合っていた。

目的

- ・目的を持って海外に研修に行くことで、より一層学びや得られるものが増えると思った。
- ・振り返りをタスク化せずに、今日何を学ぶことが出来たかを考えて行う目的意識を持つことが大切だと感じた。

(文責：仲村渠)

終わりに

謝辞

編集後記

謝辞

私たちが、今回の研修で貴重な体験をするとともに、自身のキャリアに関して多くの学びを得ることができたのは、お忙しい中私たちのためにお時間を割いてご協力くださった御講話者様や大学の皆様、また本プログラムをご支援くださるすべての方々のおかげです。誠にありがとうございました。

また、本授業で研修中の引率をしてくださった、科目責任教員の川端千鶴先生、科目担当教員の井上修平先生、また引率補助としてマレーシアにご同行してくださった佐々木さん、事前・事後授業を通してサポート・ご指導くださった本学国際交流課の橘様、劉様、親身になってご支援くださった支援生の皆様には、今一度感謝申し上げます。

最後にはなりますが、第 33 回 FSP で 2 週間の研修を通し、ともに成長したメンバー全員に感謝します。ありがとうございました。

(文責：大島)

編集後記

大島隆史

成果報告書を作成していく中で、色々な第 33 回 FSP 生から多種多様なエピソードや気づきを聞いて、2 週間の海外研修、またそれに限らず事前授業、事後授業等の FSP 全体を通して、自分を含めた 33 回 FSP 生が得た学びの量に改めて気づかされました。31 人のメンバーが得た多種多様な気づきを、なるべく多くの人に、分かりやすく伝えるように成果報告書作成に尽力しました。この報告書の執筆、また編集に携われたことを誇りに思うとともに、私自身この FSP を通して得たものを活かして、次へのステップを踏み出す努力をしていきたいと思います。

小野塚千瑛

編集に携わっていくうちに、FSP で得られた学びの多さに気づくことが出来ました。海外研修から得られる学びももちろんあります。しかし何より、個人技が多い大学でチーム行動、チーム意識について学べるのが出来たのは今後社会に入っていく者としてとても重要なことであったと考えています。改めてこちらのプログラムに参加できたことを誇りに思い、今後活かしていきたいと思っています。

鎌田侃

綿密なスケジュールの計画、報連相の徹底など、今回の成果報告書作成では私たちが研修前、研修中に直面した課題と再び向き合う形となりました。「成果報告書は FSP メンバー 31 人全員の成果物である。」という意識のもと報告書を執筆してきましたが、しっかりと 31 人それぞれの気づきを書き留めることが出来たのではないかと思います。FSP を通し、個人としてのキャリアプランの手がかりだけでなく、チームとして目的を持って行動することの難しさを学びました。FSP で得た学びはこれからの大学生活の過ごし方を考える上で十分すぎる解答だったと感じています。

瓦田優香

報告書には気づきや学びを中心に書くのですが、ただの感想になってしまわないよう工夫するのに苦労しました。研修で得た様々な刺激は明確に学びという形を取っていないことも多いです。自分の中で言語化できないものなどは、チームのメンバーにコメントをもらったり、一緒に文章を考えてもらったりして助けられました。改めてチームとして動くことのありがたさを実感する形となり、今後は反対に自分も積極的に手を差し伸べられる人間になりたいなと思いました。

菅錬之介

成果報告書を執筆することで今回の FSP で学んだことを振り返ることができました。私にとっては楽しさ半分、苦勞半分の FSP でしたが、終わってみると思った以上に学びや気づきが多いものでした。海外での研修は自分の凝り固まった考えをほぐしてくれました。実際、FSP での活動の前後で自分の思想がかなり変化していることに驚いています。FSP で学んだこと、考えたことを今後の大学生活で存分に活かせるように精進したいです。

仲村渠彩香

この成果報告書の執筆を通して痛感したのは、自分一人では、小さいということです。当たり前ですが、私一人では、ここまで多様で深い学びを記している成果報告書を作成することは不可能です。先生方や支援生の方々のご支援、31名のメンバーの FSP への真摯な取り組みがあったからこそ、この成果報告書を作り上げることができました。一人で取り組んでいては、多様な考えに触れることもできず、自分の凝り固まった思考に陥ってしまいます。このことを忘れず、今後の大学生活を送っていきます。



北海道大学

HOKKAIDO UNIVERSITY

【表紙写真】

左：FSP生と Singapore Management University の生徒との集合写真
右：Curtin University Singapore で講義を受講する FSP 生

表紙デザイン (designAC 使用)

一般教育演習 (フレッシュマンセミナー) グローバル・キャリア・デザイン1
通称 ファースト・ステップ・プログラム (FSP)
第33回FSPアジア 全体報告書：2024年5月20日 (月)

【編集】

第33回FSPアジア グループ6 成果報告書編集担当
大島隆史 小野塚千瑛 鎌田侃 瓦田優香 菅錬之介 仲村渠彩香

【お問い合わせ先】

北海道大学 学務部国際交流課

TEL：(011) 706-8040

Email：ambitious@oia.hokudai.ac.jp

Website：『北大生のための留学ガイド』

<https://be-global.oia.hokudai.ac.jp/>